

「神の赦しと鍵」

～この最もやりがいのある神からの願い！～

マタイ16章

■ 天体・月・星・季節の移り変わりを通して…

太陽が真東から昇って真西に沈む春分の日をもうすぐ迎えます。太陽と私達がちょうど真正面から向き合う時であり、私達の影が真っすぐ地平線の向こうまでいくことになるのです。こういう日が神様によって造られた日だとすれば、自らが立っている場所を感じ、どの土台に立たなければならないのかを思い返す日であると思います。

■ とりなし・悔い改め・赦し…

以前、出エジプト記から話しましたが、モーセが神様から十の戒めを頂いている最中に人々は待ちきれなくなってアロンに金の子牛を作るように命令しろと言い出し、アロンは殺されそうになって恐くなり金の子牛を作ることを許してしまいます。そこにモーセが帰ってきました。神様は怒るのです。しかし、モーセは民を滅ぼそうとする神様に対して命をかけてとりなしていきます。言うことをきかない民でさえモーセは自分の同胞と違って愛していたからです。神様はあえてモーセにとりなしをさせ、怒りをおさめたことがわかります。結果、悪いことをして失敗はしたけれど、レビ人や多くの人々がそれでも悔い改めて神様のところへ帰りました。クリスチャンの生き様というのはまさしくこれです。

■ 聖書は何と言っていますか…

皆さんは自らを見つめるために今日この場所に座っています。聖書に書かれていることは絶えず私達の考えとは違います。聖書は絶えずあなたに間違いを示そうとしています。例えばコップに泥水が入っていたとしたらそのコップが悪いのではなく泥水が悪いだけです。その人から苦いものが出ているのはその人に痛みという泥水が入っているからです。飲めないものが入っているだけなので洗えばいいだけです。しかし、私達は中身ではなくコップが悪い！と言うのです。イエス様はコップを変えるために十字架にかかったわけではありません。コップは神様によって完璧に造られたものです。中に入っているものが汚いのです。

■ ヨナのしるし…

ヨナ書を読み返してみてください。自分にとって一番の憎むべき敵国ニネベに行けと神様に言われたヨナは逃げましたが、途中で魚に飲み込まれ、3日3晩そのお腹の中で考え悔い改めました。すると魚はヨナを吐き出し、吐き出されたところからニネベまではかなりの距離がありましたがヨナは自らの決断をもって歩いて向かっていきました。そして、ヨナが神様のメッセージを伝えたらニネベの町の人々は王をはじめ悔い改めたのです。このストーリーは赦すというところから始まっているのです。赦せない人のために神様は赦しのメッセージをもって来られたのです。

■ パン種…

パリサイ人は伝承律法を神様の律法よりも重んじ、サドカイ人はモーセ五書だけを重んじ、復活も再臨も信じない人々でした。彼らがイエス様を十字架にかけた理由は自分達の立場を守るためです。パン種とは自分の立場ということです。そして、聖書の概念でパン種は腐敗をもたらすものです。最初に心にわいてくるパン種は本当に小さいものですが知らない内に膨らんでいきます。あなたの話す言葉や言い分が自分の立場であれば気を付けてください。また、パン種の話聞いた弟子たちはパンを持ってくるのを忘れたのは誰だと言いはじめました。人のせいです。まさに創世記でアダムとエバがした責任転嫁です。人類に初めて入った罪がこれなのです。「わかってもらえる」。これも自分の立場が正しかったことを求めている言葉です。自らの中にパン種があることをしっかりと知らなければなりません。

ん。

■ 天の御国の鍵…

当時の鍵は非常に大きく、体にぶら下げていました。そして鍵は王様の権限でした。この鍵を授けられるということは、城壁の門を開けるという王様の大切な権限を委任されるということです。自分達の古いルールで人々をつないだり解いたりしていたパリサイ人達でしたが、イエス様が弟子たちに与えたのは天の御国の権威だったのです。その権威とは「赦す」権威です。自分の汚さを知り、汚い自分がイエス様の十字架によって赦されることを信じる信仰によってその権威を与えると言われたのです。

■ 最大の恵みである「赦し」…

クリスチャンの最大の恵みは赦すことです。相手が自分の思いと違う行動に出た時に、なぜ？と考え、神様が語られるメッセージと神様がせよということとをそこと行わなければなりません。イエス様はなぜ、ご自分がキリストであることをだれにも言うてはならないと戒めたのでしょうか。イエス様は力ある業によってこの宣教をしたいとは思わず、弟子たちが赦す姿、変えられる姿を通してご自分の姿を見せることを望んだのです。だからイエス様は馬小屋に生まれ、人々の底辺に生き、屈辱を舐めて生きられました。その生き様を弟子たちにあらわしたのです。

■ イエス様のあとについて行く…

イエス様をご自分が十字架にかかって死んで三日目によみがえることを伝えられた時、ペテロはイエス様をいさめたと書かれています。イエス様が最初ペテロを召命された時「わたしの後について来なさい。」と言われました。イエス様の後ろから歩きなさいということです。けれど、この時ペテロはイエス様の前に立っていきめました。このいさめるという言葉は原語では若干「叱る」というイメージがあります。神様の働きを制したのです。だからイエス様は「下がれ。サタン。」と怒ったのです。けれど、この時の「下がれ」とは、「わたしの後ろに下がれ」という意味です。荒野でサタンに誘惑を受けたイエス様がサタンに言った「下がれ。」とは違う言葉が使われています。天の御国の鍵をもらって嬉しくなったペテロは今度はいつしかイエス様と対等の立場になったのです。そこでイエス様は「お前は私の後ろについてくる立場ではないか。」と言われたのです。あなたのしようとすることをイエス様の方法でしないでください。イエス様について行くというのは自分の方法でやるということではありません。それは、自分がこうだと思ふ立場をすてることです。そして、私達が自分の立場をすてる最大の痛みは相手を赦すことです。これは自らを神にささげるといふ行為です。右の頬を打たれたら左の頬を出すという行為がそこにあります。

■ もう一度感じましょう…

今日、私達はマタイ16章から赦しの鍵をもらいました。神様が人間に与えた最大の権威は「赦す」ことです。なぜ赦すのかということあなたが赦されたからです。神様はあなたに罪を示されました。そして赦された人生を得た私達は神様のためにすべてを委ねて生きるという決意をします。その決意とは今までの自らの計画に生きる生き方ではなくて神様が私に与えた生き様を私がバトンタッチして生きるという決意です。自らがどのように赦されたのかをもう一度感じ、そして自分の人生をもう一度神様に返す決意をしていきましょう。

(要約者:全本 みどり)

(2019年3月17日)